OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
2020・3・17
40

目次

2 国登録有形文化財登録記念七賢堂特別開扉講演会
「「政界の奥座敷」大磯の別荘群からみた近代史―伊藤博文から吉田茂まで―」講演抄録
6 「収蔵資料データベース」について
8 令和元年度博物館実習生による「大磯の伝導者たち」展

平成 31 年 3 月、県立大磯城山公園旧吉田茂邸地区にある七賢堂、兜門、サンルームが国登録有形文化財に登録されました。今回登録された建造物 3 件は平成 21 年の火災を免れたもので、吉田茂が暮らした当時の面影を残しています。今回の文化財登録を記念し、令和元年 9 月 23 日に開催しました講演会「「政界の奥座敷」大磯の別荘群からみた近代史」の講演抄録を掲載しています。

国登録有形文化財登録記念七賢堂特別開扉講演会

「政界の奥座敷」大磯の別荘群からみた近代史

―伊藤博文から吉田茂まで―

講師：奈良岡聰智氏プロフィール

京都大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。現・京都大学公共政策大学院教授。専門は日本近代政治外交史。著書『対華二十一ヵ条要求とは何だったのか』（名古屋大学出版会、サントリー学芸賞受賞）他

別荘地大磯の発展

もともと大磯は江戸時代に東海道の宿場町、交通の要所として重要な位置を占めていました。しかし近代に入り、大火災や宿場の廃止などで大磯は衰退の危機に晒されます。そうしたなか、1885年に当時陸軍軍医総監であった松本順が、西洋に倣った海水浴を健康増進のため日本に導入しようと提言し、大磯に海水浴場が開設されました。さらにその2年後には東海道線の大磯駅が開業し、交通の便も非常によくなりました。大磯は湘南の温暖な気候と景観に恵まれた場所だったこともあり、そうそうたる政治家や実業家、官僚たちが別荘を構え、1880年代後半から別荘地として次第に発展していくようになりました。

伊藤博文

伊藤博文は1885年に初代内閣総理大臣に就任し、政界の最高実力者として、国の根幹である憲法を作るという使命を持っていました。当時伊藤の本宅は東京の高輪にありましたが、夏島（現在の横須賀市）にも別荘を持っており、政府に反対する自由民権運動家たちやメディアの目から離れた夏島で、側近たちと合宿をして憲法草案を作り上げました。1889年に明治憲法が発布されると、その翌年に伊藤は本宅を小田原に移し、邸宅に「滄浪閣」と名付けました。10年間トップで働き続けてきた政治家としては、エネルギーを蓄え、静養する気分だったと思われます。

なぜ、小田原に家を買ったのか。推測ですが、ひとつは憲法制定作業が一段落したという事情があったからでしょう。また、伊藤は湘南の景色や気候を非常に気に入っていました。伊藤は女好き、酒好きというイメージのある人ですが、実はかなりの教養人であり、漢詩が非常に上手い。伊藤は「湘南」と題した漢詩をたくさん残しています。ちなみに、「滄浪閣」という名前は伊藤自身が名付けたもので、中国の古典に由来しています。自然の成り行きに任せて、身を処すという意味だと解釈されています。

1892年、伊藤は再度首相の座に引っ張り出され、2度目の総理大臣として非常に忙しい毎日を送っていました。そんななか、小田原の本宅を引き払ってしまいます。この理由は鉄道の路線を考えると理解できます。当時は箱根の山を越えるトンネルの技術がなかったため、東海道線は大磯、二宮を越えて国府津から現在の御殿場経由で沼津に抜けていました。現在の御殿場線が1920年までは東海道線だったわけです。よって、東京から小田原に行くためには、国府津で下車して馬車鉄道に乗り換える必要がありました。首相として激務をこなさなければならなかった伊藤にとって、小田原は交通の便が悪く、あまりにも遠すぎたので、伊藤は小田原の邸宅を引き払い、1896年大磯に邸宅を移しました。この時、伊藤は知人の文人たちを招いて大磯滄浪閣落成の宴を開き、日清戦争の際中国側の講和会議全権であった李鴻章から「滄浪閣」と書かれた額を貰いました。

大磯に滄浪閣を建てた理由としては、大磯がすでに政界の「奥座敷」として発展しつつあり、多くの政治家や実業家が集う場所となっていたことも挙げ

られるでしょう。伊藤は非常に賑やかな人の集いが好きな人でした。伊藤より前に別荘を構えていた山縣有朋は伊藤のライバルでしたが、もともとは同じ長州出身で親しい関係でした。山縣の別荘にも伊藤はしばしば訪問していたようです。

また、伊藤の側近であった陸奥宗光の影響もあります。陸奥は伊藤内閣の外務大臣を務め、日清戦争では伊藤と二人三脚で戦争の指導に当たりました。ところが陸奥は肺結核を患い、日清戦争後に体調を崩して、静養を余儀なくされました。この時陸奥が静養の場所として選んだのが大磯で、1894年に別荘を取得し、外相在任中からしばしば大磯で療養に努めました。陸奥は大磯を非常に気に入っており、陸奥から伊藤に宛てた手紙には「自分の家の隣には鍋島邸があり、鍋島邸を囲んでいる深い山林の景色は、私の家よりももっと素晴らしい。ぜひここを買え」と伊藤に勧めている記述があります。

伊藤はその後大磯に本籍を移し、大磯の滄浪閣が伊藤の本宅となります。大磯に邸宅を構える人の多くは東京に本宅を持ち、週末や夏冬に利用するための別荘を大磯に持つというパターンだったのですが、伊藤に関しては大磯が本宅となっていました。しかし、伊藤は東京やソウルに常駐していた期間も長く、大磯の本宅は別荘的な性格をかなり濃厚に持っていたと言えるだろうと思います。

伊藤は普段多忙のため、自分のプライベートの時間はほとんど取れませんでした。このため滄浪閣は、面会や仕事を遮断し、とにかくゆっくり休む「静養の場」として、また、本当に親しい政治的なパートナーたちと付き合いをする「交遊の場」として機能していました。加えて、大磯は東京に比べると非常に静かで、じっくり本を読み、漢詩を作る「思索の場」でもありました。政治家にとって人付き合いは大切ですが、同時に孤独になって物事を考える時間も非常に大事です。伊藤はそういった時間を大切にしていました。

残念ながら伊藤は日記を書いていませんでしたので、大磯での伊藤について詳しいことはわかりません。しかし、当時大磯に来ていた人のなかで、「日本資本主義の父」と呼ばれ、多くの株式会社の設立に関わった富豪の実業家・渋沢栄一が詳しい日記を書いています。

渋沢栄一は大磯を大変気に入っており、1897年大磯にあった旅館、祷龍館の出資者になって以来、よく大磯に滞在していました。1899年の大磯滞在の様子を彼の日記から見てみましょう。渋沢はこの年の元旦、東京の本宅で様々な人と正月の挨拶を交わした後、汽車に乗って大磯に向かい、祷龍館に泊まりました。風邪気味だったこともあり正月の2、3日は古今集などまったく仕事とは関係のない文学作品を読んでいたようです。4日から6日までは、人に頼まれた揮毫をしていました。その合間を縫って、大磯に別荘を持っていた人々とお互いの家を行き来しています。伊藤も1月4日に来ています。また、別の日には三菱の岩崎弥之助と製鉄所に対する出資の話をしたり、山縣有朋と日本郵船の保護について話をしたりしている。政治経済に関する非常に重要な話し合いや決定が、静養の合間に行われていました。他方、夏の滞在も見てみましょう。同年8月10日のお盆前に渋沢はまた祷龍館に泊まっています。この時もなぜか風邪気味でしたが、2週間の夏休み中に海水浴や散歩、読書をしています。ただその合間にも、日本女子大学の創始者である成瀬仁蔵と大学の将来について考え、九州の実業家松本重太郎や三菱の岩崎久弥と鉄道をどうするか話し合っていた。渋沢の日記は、政界の奥座敷と呼ばれていた当時の大磯の雰囲気をよく伝えています。

さらに紹介しておきたいのは、伊藤と親しい人たちとの交遊です。伊藤に連なる政治家や官僚たちが、伊藤の後を追うように大磯に次々と別荘を購入し、

伊藤博文邸　滄浪閣

伊藤と親交を深めていく現象が見られます。

伊藤と親しかった人物を３人だけご紹介しましょう。まず１人目は西園寺公望です。西園寺は伊藤内閣で文部大臣を務め、さらに病気で外相を辞めた陸奥宗光の後任も務めました。伊藤は西園寺を非常に評価しており、自身の後継者のひとりとして期待していました。そこで、伊藤は自宅の隣に別荘を買えと誘うわけです。西園寺はそれを受けて滄浪閣の隣に別荘を購入しました。伊藤のお茶目なところですが、伊藤は西園寺が買った別荘に「隣荘」と名付けました。伊藤が書いた額も残っています。なお、伊藤が創設した立憲政友会という政党は、初代総裁の伊藤の跡を継いで西園寺が２代目総裁に就任しています。

２人目は原敬です。彼は盛岡出身で、外務省に入り、のちに政治家となり首相となる人物で、陸奥宗光の子分でした。晩年の陸奥の傍にできるだけいたいと大磯の南下町に土地を借り、別荘を新築します。原は陸奥の没後伊藤とも親交を深め、やがて政友会に入りました。のちに伊藤、西園寺に次ぐ３代目の総裁となりますが、大磯にその人間関係の原点があったことも興味深いところです。

最後にもう一人、加藤高明を紹介します。彼も原と同じ外務官僚で、陸奥宗光の子分でした。同時に重要なのは、加藤は三菱の創業者岩崎弥太郎の娘婿だった点です。岩崎家との関係が主なきっかけとなって大磯に別荘を持ったのでしょう。加藤も伊藤と親しく、伊藤家と家族ぐるみで付き合いをしていました。

このように、伊藤に連なる人たちが大磯に次々と別荘を買い、互いに親交を深めましたが、1909 年の伊藤暗殺を契機として、政界の奥座敷としての大磯は衰退していきます。単純に伊藤が亡くなったことだけが理由ではないと思いますが、この時期、大物の政治家や実業家たちが大磯の別荘を手放し、ほかの土地へ移っていく現象が見られます。交通網が発達するにつれ、次第に大磯以外の地域にも別荘地が開発されました。皆それぞれ好きな場所に移り、そこで自分の仲間を呼び寄せ、新たな別荘地を形成する。大正時代に入りますと、むしろ大磯よりも軽井沢のほうが政界の奥座敷として機能していくようになります。

伊藤の死後、滄浪閣は李王家に譲渡されました。李王家は韓国の皇室でしたが、韓国併合とともに日本の皇族に準じる待遇を与えられました。李王家に無償で滄浪閣を譲ったのは、伊藤の遺志を継いだ梅子夫人の決定によるようです。伊藤はもともと韓国併合に反対でした。伊藤は併合で一つの国家を消滅させたことに対する痛みを抱えていたようで、韓国との難しい関係が滄浪閣の李王家への譲渡からうかがえます。その後、滄浪閣は 1923 年の関東大震災で大破し、昭和初期になってから再建されました。再建の際には、滄浪閣の部材が一部活用されました。

吉田茂

吉田茂はジャーディン・マセソン商会の横浜支店長を務めた吉田健三の養子として、幼少期は大磯で過ごしました。東京帝大卒業後外務省に入省し、外交官として世界各国に赴任したため、外交官時代に大磯で暮らすことは叶いませんでした。しかし、その間も吉田は大磯邸をずっと維持していました。

1930 年代、吉田は永田町に本宅を持っていましたが、外務省を辞めてからは次第に大磯邸も利用するようになります。吉田は太平洋戦争に批判的で、戦争中は終戦工作を行っていました。大磯は東京から少し距離があり、終戦工作には絶好の場所でした。吉田と考えを近くする、西園寺公望の秘書であった原田熊雄や、三井銀行頭取や近衛内閣の大蔵大臣を務めた池田成彬などが大磯に別荘を持っており、吉

現在の旧吉田茂邸

田と連絡を取り合っていました。陸軍は吉田を危険視し、永田町や大磯の家にもスパイを送り込んでいました。45 年 4 月に、吉田は大磯で憲兵隊に逮捕され、陸軍の刑務所に拘留されます。しかし 8 月に戦争が終わり、吉田は軍に抵抗したことで、逆にそれが彼の政治的な出世、台頭の糸口となりました。戦後吉田は外務大臣、自由党総裁、総理大臣というふうに政界の中枢に駆け上っていきました。

1940 ～ 50 年代、大磯の邸宅はかなり古びていたそうです。吉田は首相時代、大磯をそれほど積極的には使っていません。夏の避暑の際も御殿場や箱根に行っています。新聞報道によると、大磯には設備が整っていなくて暮らしにくかったそうです。しかし、引退後は大磯に住もうと考えていたようで、首相在任中に大磯の邸宅を増改築しています。54 年に吉田は首相を引退しますが、その際、娘の麻生和子の証言によると、「じゃあ、もう首相は辞めて、大磯でゆっくり本でも読むか」という一言を発したと言われています。

伊藤博文の別荘と同じく、思索のための別荘という側面が吉田の大磯邸にもありますが、それよりも迎賓館としての役割のほうが有名ではないでしょうか。吉田の大磯邸は「海千山千荘」と命名されていました。吉田自身の解説によると、「政治家や官僚など海千山千の強者ばかり来るから「海千山千荘」と名付けたんだ」そうです。こういう伊藤博文の茶目っ気にも通じるような、ユーモアを含んだ名称を付けています。その海千山千の代表が外国からのお客さんで、現役の西ドイツ首相のアデナウアーや後に大統領になるアメリカのニクソン（当時は副大統領）、ライシャワー駐日大使などが吉田邸で会談しています。

例えば、アメリカのライシャワーが残した日記を見ると、「大磯に来たとき、吉田はいつになく警戒しているようだった」とあります。話の内容は書かれていませんが、かなり緊張したやり取りがライシャワーと吉田の間で交わされたことを示唆する記述です。「この会談は日米関係の地固めの上で大いに価値があった」という記述もあります。首相を辞めて引退している身とはいえ、池田勇人内閣、佐藤栄作内閣の後見人のような形で、吉田はずっと政界に君臨していました。外国の政治家が来るのもやはり単なる儀礼ではなく、真剣な外交の場だったというふうに考えられます。

また、吉田が首相を辞めた後、政界の元老のような存在になり、政治家や実業家が吉田の大磯邸に頻繁にやって来る「大磯詣で」が繰り広げられたと言われます。しかし、吉田邸の中で実際何が話し合われたのかはあまり記録がありません。吉田は外交官出身だったため、情報が変な形で残ったり漏れたりするのを恐れて日記を残しませんでした。私が見た範囲では、一番価値がある記録は「佐藤栄作日記」です。佐藤栄作は吉田のライバルであった岸信介の弟ですが、吉田の一番の愛弟子でもありました。佐藤は 1964 年から 72 年まで首相を務めましたが、彼があれほどの長期政権を保ち、実績を残したのは、明らかに吉田茂の後ろ盾があったからだと言えます。佐藤はお酒も飲まない非常に真面目な人で、日記を毎日丹念につけていました。

1964 年東京オリンピックの年に、池田首相が癌で首相を辞め、11 月に佐藤栄作が首相になります。この年の佐藤の日記を読むと、64 年に吉田邸を訪問したのは、岸信介元首相、佐藤の側近である保利茂自民党代議士、吉田の側近であった北沢直吉前代議士で、さらに佐藤自身も何回も通っていました。また吉田の娘婿の麻生太賀吉、木戸幸一元内大臣たちが来て、政治上非常に重要な話し合いが行われていることも確認できます。池田の後任について、佐藤は大磯を訪問して吉田と話し合っています。おそらく自分を次の首相にしてくれと売り込んだのでしょう。翌年も、佐藤は忙しいなか 10 回ほど吉田のもとを訪れています。佐藤は非常に吉田と信頼関係が厚く、頻繁に吉田のアドバイスを受けていました。興味深いのは、2 月に佐藤が鎌倉にあった前田侯爵家の屋敷を借りて別荘にしていることです。彼は週末鎌倉に行き、ついでに大磯に足を延ばして吉田と会うライフサイクルを、67 年に吉田が死ぬまで続けました。

おわりに

大磯の地に別荘的な本宅を構えたという点で、伊藤と吉田は共通していますが、この２人の邸宅の歴史を追うことで日本の保守政治の大きな流れが俯瞰できるように私は感じます。七賢堂はその象徴的な存在で、伊藤博文が先輩である大久保利通や木戸孝允から政治指導のポジションをバトンタッチされ、やがてそれが西園寺公望や吉田茂に受け継がれていきました。明治から昭和の戦後期にかけて、日本の国家指導を行った保守政治家たちの流れが、七賢堂からよくうかがえるように思います。

（編集：当館学芸員／久保庭、飯野、中原、温水）

「収蔵資料データベース」について

大磯町郷土資料館（以下、当館）では、令和元年（2019）７月 19 日から、大磯町郷土資料館・旧吉田茂邸ホームページに、「収蔵資料データベース」のページを公開し始めました。ここでは、「収蔵資料データベース」のページについて紹介します。

「収蔵資料データベース」の作成

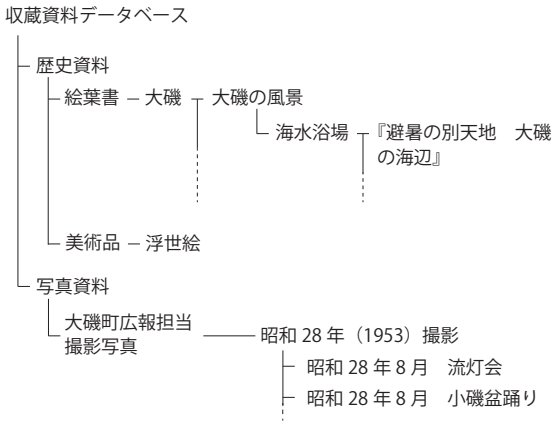
当館では、設置主体である大磯町のホームページ内に特設ページを作成することによって、ホームページを運用しています。平成 29 年（2017）4 月に、旧吉田茂邸の公開と運営を始めたことにより、現在の特設ページを開設しました。

特設ページを開設する前は、町のホームページ内の一つのページとして、当館の情報を公開していました。特設ページを開設することにより、町のホームページ内でも、より目立つかたちで情報を公開することができるようになり、以前の方法より、インターネット上の情報発信に意味を持たせることができています。また、特設ページの運用については、当館が主体的に行うことができるようになり、以前と比較して、より自由にページを作成することができるようになりました。そのため、新しい試みとして、「収蔵資料データベース」のページを作成することになりました。

当館では、「湘南の丘陵と海」をテーマに、大磯町を中心とした地域に関わる考古、歴史、民俗、自然の資料を収集し、保管しています。その資料点数は、未整理のものを含め、4 万点に及びます。現状では、常設展示や企画展示などの展示によって紹介していますが、紹介できる資料は限られています。昨今、博物館等の資料を保管している施設の間ではデジタルアーカイブが話題になり、インターネット上で積極的に所蔵資料を公開していく動きがあります。しかし、本格的にデータベースのシステムを構築するためには、いろいろな方法があるとはいえ、費用がかかります。

当館が作成した「収蔵資料データベース」のページは、既存の町のホームページのシステムを利用して作成しています。もちろん、データベース用のシステムではないため制約は多いですが、それでも最低限、画像と資料情報を公開することはできます。当館が所蔵する膨大な資料をより多くの方に知って

「収蔵資料データベース」トップページ



現在公開している分類の構成（部分）

いただき、活用していただく方法として、既存のホームページ作成システムを利用することは有効であると考えています。

「収蔵資料データベース」の仕組み

当館の「収蔵資料データベース」のページは、郷土資料館の「調査研究」のページ内にあります。「収蔵資料データベース」のトップページから、資料の分類ごとに調べることができるようカテゴリを作成し、分類をたどることによって資料を調べられるようにしています。

分類をたどり、最後に開くページに、画像や資料情報を掲載しています。このような構成は、全て、既存のホームページのシステムで作成することができます。ホームページ作成用のシステムでは、テキスト情報、リンク、画像データ、PDF データなどを挿入するエリアがフォーマットで決められていますが、個々のエリアを工夫して使用することによって、画像を表示させ、説明を付けることは、比較的容易にできます。おそらく、自治体が採用しているシステムのほとんどは同じような方法でホームページを作成していると考えられますので、特別な費用をかけなくても、当館が作成しているような「収蔵資料データベース」のページを作成することができるのではないでしょうか。

インターネット上で画像を公開する限り、その画像の複製がダウンロードされることを厳密に管理することは不可能です。そのため、当館では、「収蔵資料データベース」ページの公開にあたり、資料の利用方法を見直しました。

今までは、個人での利用を含め、いかなる目的での利用であっても、利用に関する申請書の提出を求め、承認書を発行した上で、担当の職員が画像データを電子メール添付などの方法で提供していました。しかし、「収蔵資料データベース」のページに掲載している画像データについては、個人での利用には申請書の提出を求めないことにしました。テレビ番組や出版物の利用については申請書の提出を求めますが、画像データを「収蔵資料データベース」のページからダウンロードしていただくことによる

鴨立庵の絵葉書を公開しているページ

利用を、原則的にお願いしています。この方法に変更したことにより、早急な対応を求められるメディアの希望にも応えられるようになりました。

「収蔵資料データベース」の課題

ホームページの作成システムを利用してページを作成しているため、残念ながら多くの制約があります。まず、「データベース」と冠していますが、検索機能が備わっていません。この点は大きな課題です。

また、画像データの精度を可能な範囲で上げたいところではありますが、画像データをアップロードすると自動的にデータが圧縮されるため、精度の低い画像データしか提供できていません。テレビ番組や出版物における利用では精度が足りず、改めて別の方法でデータを提供する対応もしばしば発生しています。

システムの制約以外にも、画像データの利用方法については検討の余地があると言えるでしょう。インターネットで公開するということは、全世界で画像を利用できるということになります。また、画像データは、容易に複製し、改変することができます。資料画像をインターネット上に公開するということは、可能性が低いとはいえ、悪意によって利用される可能性があることを覚悟しなければなりません。現状では、博物館資料の利用促進を重視し、善意での利用を前提として、「収蔵資料データベース」のページを運用していることになります。著作権の問題も含め、「収蔵資料データベース」の運用には、

一定の慎重性が求められます。

博物館の所蔵資料をインターネット上で公開することは、資料がより多くの人に認知され、活用されるきっかけとして大いに有効です。費用をかけて、より活用しやすいデータベースを構築することが望ましいですが、博物館施設の中には、当館のように新たな事業を始めることが難しい施設もあると思います。当館の「収蔵資料データベース」の運用は決して完璧ではありませんが、可能な範囲での対応事例として、参考にしていただければ幸いです。今後も、「収蔵資料データベース」のページ内容をより充実していく予定ですので、ご注目ください。

（当館学芸員／富田）

令和元年度博物館実習生による「大磯の伝導者たち」展

当館では、毎年、博物館学芸員資格取得を目指す実習生を受け入れており、実習の一環として廻廊を使って、実習生自らが企画から完成までを実践する展示替実習を行っています。

本年度は、「大磯の伝導者たち」というテーマで、ポスター展を令和元年９月28日から12月８日まで開催しました。展示では、学生たちのそれぞれの関心から、大磯で新たなことを始め、人々に広めた人物７名を取り上げました。

新しい「農作物」の栽培に取り組んだ添田辰五郎や渡辺慶次郎、「海水浴」を開いた松本順、「教育」を大磯に広めた小野懐之、朝倉敬之、伊東希元、そして戦後の教育普及に尽力した吉田茂も教育者として取り上げました。

実習生たちは、限られた時間のなかで、お互いに意見を出し合い、試行錯誤しながら展示を作り上げました。完成したポスターはそれぞれの人物の業績、魅力をわかりやすく伝える力作となっていました。

Report　－大磯町郷土資料館だより－　No. 40
令和２(2020)年３月17日発行

編集・発行　大磯町郷土資料館
〒255-0005　神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
TEL. 0463(61)4700 ／ FAX. 0463(61)4660